

変える・守る・育てる・創る

第23回

女だから経営論

取材・文 三好 かやの

竹内美栄子さん
(石川県・金沢市)

〒920-0377 石川県金沢市打木町西178
TEL・FAX 076-249-7478



これが日々の忙しさも疲れも、たちどころにふっ飛ばしてしまう「バリバリのキャリアウーマン」の笑顔だ。

Profile

たけうち・みえこ 1952年石川県金沢市出身。松任農業高校卒業。父親の礎さんの後を受けて後継者に。スイカ、ダイコンの栽培に携わる。72年、正喜さんを養子に迎え入れ結婚。83年正喜さんは内灘町の河北潟干拓地2haでレンコン栽培に着手。以来夫婦別経営がスタートする。美栄子さんは89年からは花栽培をスタート。現在は両親と次女の恵里佳さん、パート4人を率いて野菜と花2haを経営。ダイコン、トマト、キュウリの他、花はトルコギキョウ、ストックなど9品目を年間通して栽培。年間4000万円の収益を上げている。

できるかできないか、
毎日が挑戦

竹内美栄子さんは、とても忙しい人だ。竹内家の4台の洗濯機がそれを物語っている。

1台は亡くなつた美栄子さんのおばあさ

ん、もう1台は母親の信子さん、そして美栄子さんの一槽式、4台目は2人の娘さん用。一世代に1台の割合で、4台の洗濯機をフル稼働させるほど洗濯物が多い家なのだろうか?

「朝、洗濯物を入れて回すうちに、パートさんが来る時間になるけん、パートと畑に掛けだしていく。ずっと畑に出て、夜帰つて脱水して干して…。その間『洗濯機空けて』と言わても無理。全自动だとシワになるから『槽式でないとダメなの』

畑仕事の合間に縫うようにして家事をこなす。ダイコンの収穫期には朝3時から投

光機の照明の下で収穫し、市場へ送り出す。年間を通して花の出荷が最も多い6~7月になると、朝5時から一度に6000本の花を収穫し、選別、箱詰め、出荷をこなす。

ぶつ続け「36時間労働」の日もザラといふ。「花を市場へ持つて、納屋へ帰つてやつと長椅子でコクリコクリ。私どこでも寝られるの(笑)。最初からこなせんほどの量を作つてるのはわかつてどくどく案外やつてみたらうまいこといく。自分の器はどんどんものんかなあ思つて。で

きるかできないか挑戦や

とスカーツと日本晴れのような晴れやかさで笑い飛ばす。毎日これだけの仕事量をこなしながら、このお母さん、どうしてこんなに元気なんだろう?

夫の家出で「夫婦別経営」に

竹内家の長女として生まれた美栄子さんは、妹と一人姉妹。子どもの時分から、父親の礎さんに「お前は跡取りや、跡取りや」と、言われ続けて育つた。それはあたかも宗教団体の「洗脳」のようだったという。

「でも、子どもの頃からずっと農家で育つているから、悪いところは全部わかる。体は使うし、ちつともきれいな仕事じゃない。それでも家を出る勇気はなかった。だって物心ついた時から、跡継ぎ、跡継ぎって言われてきたもの。逃げ出せん。オウムと一緒にや」

農業高校卒業後は、父の礎さんの指導の元、畑に出る毎日。いつも空を見上げては「あの太陽、早く落ちろ」と念じていたといふ。

そんな美栄子さんがお見合いで結婚したのは20歳の時。相手の正喜さんはサラリーマンで農業経験はゼロ。美栄子さんの伴侶となる以上、竹内家とともに農業をすることが条件だった。

結婚後は、礎さん、信子さん、美栄子さん、正喜さんの4人で農業を続け、いずれ

は経営を若夫婦が引き継ぐはずだった…。
ところが、

「お父さんが出て行ってしまった」

予想外の転機が訪れた。礎さんは当時現役のバリバリ、一方正喜さんもキャリアを積んで、自分のやりたい農業が見えてきた時期。一つの家に経営者は一人いない。二人の間で摩擦が起き、正喜さんが家を出でていってしまったのだ。

といつても、ただの「家出」ではない。正喜さん自身も農業を続けたかった。礎さんの手前、近くに簡単に別の農地を取得するわけにはいかない。そんな時、金沢市の隣の内灘町の河北潟干拓地で新規入植してレンコン栽培に携わる生産者を募集していたが、希望者が集まらず、ずっと空き状態。そこで正喜さんは83年、金融公庫から融資を受け、新たに2haのレンコン田を取得し、栽培を始めることになった。

大変なのは父親と夫の「板ばさみ」状態の美栄子さんである。夫はレンコンを始めると、でも美栄子さん抜きで竹内家の農業は立ち行かない。

そこで美栄子さん夫婦は、2人の娘と近くの団地に住もうことになった。そこから正喜さんはレンコン田へ、美栄子さんは実家の畠へと、夫婦で別の農地に「通勤」する形だ。それぞれの農地は離れているので、管轄する農協も別。必然的に口座も分かれ、「夫婦別経営」の農業が始まつた。

それから5年間の団地住まいを経て、美

栄子さん夫婦は実家に舞い戻るが、その間

礎さんの経営は、正喜さんではなく、美栄子さんに引き継がれた。美栄子さんは、名実共に竹内家の「跡取り」で経営者になつたのだ。

現在は、レンコンが一段落する5月から8月まで、正喜さんも夏野菜の収穫を手伝っている。またレンコンの忙しい時期は、

美栄子さんも箱詰めを手伝うなど、ちょうどいい協力体制が出来上がつてきた。

男でも女でも、 やりたい人が経営者

美栄子さん自身に転機が訪れたのは89年。石川県の経済連の呼びかけで、花栽培を始めた頃だった。昔からスイカ、ダイコ

ンの産地だった打木町に新たな作物を、と

いう試みの一貫で、美栄子さんは早速ストックの栽培に着手した。

「それまで、スイカ、ダイコンを作つていれば、畑の色を見ただけで『あの家は下手だ』って分かつてた。でも、花のことは周

りの人誰もわからん。秀品作ろうと、優品作ろうと『きれいに咲いとるね』って言わ

れる。おじいさんも、スイカ、ダイコンに

関わってはいろいろ言つてくるけど、花を始めたら一切口出しできん

花という「自分の作物」を得て、美栄子

さんは俄然勢いづいた。

現在はヒマワリ、ケイトウ、スタークス、

トマト、キュウリ、ダ

イコンなど野菜の売り上

げも含めて、竹内家の収益は年間4000万円。

うち3分の1は花が占めている。正喜さんのレンコンの収益は別勘定。美栄子さん自身、その金額については「よく知らない」のだそうだ。けれど、経営についてお互い相談はするし、作業が忙しい時は手伝い合

っている。

一やつぱ男と女では、経営感覚に違いはあるんでしようかね。

「私は自分自身が男とか、女とか、せんぜん感じない。竹内美栄子、ひとりの個体や」と思つてやつてる

ー息子がいなければ婿を取つて跡取りに。男がないと農業は続けられないといふのは?

「農業するのに男・女は関係ない。やりたい人が一人いれば、それが経営者や。あと

は家族やパートさんに手伝つてもらえばいいんだから」

独立してゼロからレンコンを始めた正喜

トルコギキョウ、カラ

ナデシコ、ストック、キ

ンギョソウ、デルフィニ

ユウム、チドリソウなど

9品目を年間通して出荷できる体制になつて

いる。



これが打木地区名産の源助大根。「ここでしか獲れんの。食味も良くて、そこの青首大根とは、エライ違いや」。この日、夫の正喜さんは内灘町のレンコン田へ。会えなくて残念。

農業を引き継ぎながら、花栽培という新境地を切り開いてきた美栄子さんも経営者は今はどつちも有りの時代だ。糸原曲折はあつたにせよ、そんな一人が夫婦であり、農業者として「同格」だということも興味深い。

家族だからというだけで、同じ農地に縛られて職住を共にするだけが、家族経営ではない。それぞれが経営者の器を備えているなら「夫婦別経営」だつてあり得る。竹内夫婦の場合、最初からそうしようと目論んでいたわけではない。「すつたもんだけの挙げ句、たまたま農協の口座が別れてしまつただけ」というけれど、今になつて振り返れば、それが当たり前のかもしれない

と、美栄子さんはいう。

それにしても、以前は「太陽落ちろ」と念じていた美栄子さんが、今では堂々たる経営者ぶり。どうしてこんなにハマつてしまつたのだろう?

「仕事が完全にわからん状態で、上から命令されるだけ。それでは誰だつて面白くないわ。休みをもらつても平のサラリーマンが面白くないのと同じ。ところが、上へ立つほどだんだん面白くなつてくる。花やつて野菜やつて。今はぜんぜん休みなんてないわね。毎日大きくなつてしまつて、ちょっとでも手エ抜いて虫に食われたらアウトやもん」

花の出荷は週3回。収穫と選別、出荷に追われる。それと並行して野菜も出荷しなければならない。野菜の肥培管理は穣さん、育苗は信子さんの担当で、パートも4人雇い入れているとはいき、美栄子さんの背負つてている責任と、プレッシャー、緊張感は相当なものだ。それでも、「型にハメられて生きるより、いいも悪いも腕次第。平坦な道よりゲーム、ゲーム。私の采配ひとつで百万単位のお金が行つたり来たりする方が面白いもん」

とまたも、スカッと晴れやかな笑顔で言いつてしまつのである。本物の「バリバリのキャリアウーマン」というのはこういふ人のことを言うのではないか。

花は根性悪くないとダメ?

竹内家のある打木町は海岸近くの金沢市西部に位置し、市内で最も農業生産の盛んな地域である。以前はスイカ、ダイコンの露地栽培と稻作との複合経営が多くつた

が、水田に砂を客上して畠地に転換する事業が始まった。

70年代半ばからパイプハウスでの施設園芸が拡大し、キュウリ・トマトの栽培が開始された。それだけに野菜に関しては、農協の共販体制が整つており、選果手数料と引き替えて、出荷の手間を省くことができる。



景気、相場、そして時間に追われる花栽培は、毎日が真剣勝負。「現状維持ではダメ。常に新しいものに挑戦していかんと」(キンギョソウのハウスにて)。

ツトに繋がるから、ノウハウは隠さず伝え合う気風の中で育つてきました。ところが外見

重視の花の場合、少しの品質の差が

格段の値段の違い

を生む。優秀な生

産者はそのノウハ

ウを他人には教え

ない。「根性悪

にならなければ、

利益が上がらない

シビアな世界だと感じている。

トルコギキョウの最盛期。冒頭に書いた

手間も多い。

野菜は出荷すれば、安くても絶対値段がつくけれど、花は売れなかつたら売り上げゼロで、運賃も箱代も全部こつち持ち。そ

こがはつきりしてゐる。だからリスクを分散させるためにも少量多品目の方がいい」

野菜に比べて嗜好的な要素が強く、景

気の浮き沈みにも振り回されやすい花栽培

で収益を上げていくには、今までと違つた経営感覚とセンスが必要だ。

1年間を通して、6月が花のピーク。同

じ時期にこれ以上手は広げられないで、

別の時期にもうひとつピークを作つてみよ

うかと考えている。そんな美栄子さんに聞

いてみた。

「今一番ほしいものは?」

「時間、今はより時間がほしい。落ちていくお日様を見ながら、ああ誰かつつかい棒をして止めてほしいわ、と思うもの」

「早く落ちろ」と言つていた娘時代とは別人だ。そしてもうひとつほしいのは「後継者」だ。美栄子さんは娘さんが2人いるが、後継者に男女の区別はいらないことは、既に実証済み。

次女の恵里佳さん(21歳)は、既に嫁ぎ先が決まり家を出ることになつていて、期待の星は長女の佐緒利さん(22歳)。現在はコンピュータのプログラマーとして会社勤めをしている。昔の美栄子さん同様

「跡取り」と言わることに抵抗を感じてゐるようだ。

「今すぐとは言わないけれど、娘の子育てが終わつた頃に引っ張ろうと…。跡継ぎ作るのも経営者の仕事やもん」と、戦略を練つてゐる様子。たしかにここまでこの仕事にハマれるとは、美栄子さんは自身も思つていなかつたはずだ。

「どうせ働くなら、人の下にいるよりリスクとせめぎ合いながら自分で切り開いていく経営者の方が、断然面白い。農業なら子育てが終わつてからだつて、40歳を過ぎたつてそれができるし、生涯現役や。こんな仕事他にあるかい?」

美栄子さんは、これからこのメッセージをどうやって伝えていくのだろう?

「花は根性悪くないとダメなんや」
打木町には、共販体制の中で、地域全体で同じ作物を作り続けてきた歴史がある。みんなで品質を上げることが各農家のメリ